

平成 30 年 5 月 26 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04065

研究課題名(和文) 場に応じた柔軟な欺き行動と道徳判断による社会性の発達

研究課題名(英文) Social development about the flexible deception and moral judgement depending upon the context

研究代表者

林 創 (HAYASHI, Hajimu)

神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：80437178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、子どもを対象に、「場に応じた柔軟な欺き行動と道徳判断」に着目し、その発達過程を心の理論と関連づけながら、実証的方法で解き明かすことを目的とした。研究の結果、欺きに関連する面については、児童期を通じて、心の理論のさらなる発達とともに、場に応じた皮肉の理解が進むことが明らかになった。また、道徳判断に関連する面については、平等な分け方については、「配分の平等」ではなく、「結果の平等」への好みは幼い頃から強いことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study was to clarify the development about a lie and moral judgment depending upon the context. The results demonstrated that children begin to understand that the understanding of irony were related with second-order theory of mind and this understanding develops during elementary school years. Another results revealed that young children and adults prefer distribution by equal-outcome to distribution by equal-allocation.

研究分野：発達心理学, 教育心理学

キーワード：認知発達 児童期

1. 研究開始当初の背景

子どもの社会性の発達を考える上で、「欺き行動」と「道徳判断」は重要である。なぜなら、人は誰でも他者を欺く（うそをつく）とともに、他者の行動の善悪を道徳的に適切に判断する必要があるからである。

認知発達の研究では、ピアジェ(e.g. Piaget, 1932)以降、うそや道徳判断が幼児期に大きく発達することが明らかになっている(e.g. Astington, 2004; Talwar & Lee, 2008)。しかしながら、うそは他者を騙すネガティブなものだけではない。児童期になると、他者を傷つけないための「向社会的なうそ」もできるようになる。このように、うそはネガティブなものからポジティブなものまで多様であり、それに対応して道徳判断も柔軟にする必要がある。すなわち、場に応じて柔軟にうそをつき、適切に道徳判断ができるようになることが、子どもの社会性の発達を解明する大きな手がかりになる。

しかし、これまでうそと道徳判断の発達は、個別に調べられることが多く、両者を関係づけて検討した研究はあまり見られなかった。また、幼児期において単純なうそや道徳判断が可能になる時期を探る研究が大半(e.g. Talwar & Crossman, 2012)であり、「場に応じたうそと道徳判断」の発達過程を検討した研究は、ほぼ見られないのが現状であった。

2. 研究の目的

本研究では、心の理論を中心とした社会性の発達が、場に応じた欺きや道徳判断を促すことを、幼児期から児童期の子どもを対象にした実証的研究で明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

1つ目の「場に応じた柔軟なうそ」に関しては、児童期の子どもを対象に、うそと対でよく提示される皮肉の理解に関する研究を実施した。

具体的には、これまでの研究では、児童期の頃からは、事実と違うことを言う発話の一種として、うそと皮肉を区別できるようになることが知られていた。しかし、日常場面では、話し手は皮肉を言ったつもりが、そうとは解釈されず、うそと誤解されるような場合がしばしば生じる。そこで、本研究では、小学生を対象に、話し手の意図と結果を組み合わせることで、子どもは発話をどう理解しているかを検討することにした。また、事実や心の状態の理解と、発話が何かという判断の間に関連が見られるかどうかを検討した。対象年齢は、小学2年生、6年生、そして大人であった。

2つ目の「場に応じた道徳判断」に関しては、幼児期の子どもを対象に、道徳性と関連するものとして、公平感に注目した研究を実施した。具体的には、これまでの研究では、資源の分配において、幼児が利己的な分配から公平な分配を好むようになることが知られていた。しかし、私たちの日常では、分配以前に何らかの資源を自分と他者のいずれかが持っていることもあり、このような場合、平等な分配には、分配後、結果的に自分と相手の資源が同じになる「結果の平等」と、既に持っている分を加味せずに、分配する資源を均等に分ける「配分の平等」の二つが考えられる。そこで、幼児が「結果の平等」と「配分の平等」のどちらを好ましいと判断するのかが検討した。また、比較する対象として、大人にも同様の調査を実施した。

4. 研究成果

1 つ目の研究については、皮肉の発話について、低学年ではまだ正しい理解があまりできず、高学年になると、意図と結果が食い違っているような場合でも、正しく理解できる割合が増える傾向がみられた。過去の研究では、うそと区別して皮肉の理解ができるようになるのは、8、9 歳頃と言われており、本研究の結果は、これまでの知見に合致するものであると考えられる。

これにより、皮肉の理解を、より深いレベルで検討することができ、社会性の一つとして、児童期に場に応じた発話とその理解が発達する様子が明確になった。

2 つ目の研究については、大人と同様に、幼児も「結果の平等」を好む傾向が強いことが明らかになった。ただし、そこには発達的な差もあり、幼児の場合は、自分が既に資源を持っている場合は、新たな資源について「配分の平等」を好む場合もあることが明らかになった。

これにより、これまで明らかになっていた平等分配の好みについて、より深いレベルで検討することができた幼児期に道徳性ととも、平等に対する認識などの社会性が大きく発達する様子が明確になった。

以上の研究より、幼児期に心の理論の基本が発達するが、児童期に心の理論がさらに洗練される形で発達することで、単に欺いたり、道徳判断ができるようになるだけでなく、場に応じてうそや皮肉を識別したり、道徳判断も変化させる様子が示唆された。今後は、さらにさまざまな状況を設定したり、中学生や高校生など青年期の子どもも対象に加えるなどによって、児童期から大人になるまでの、場に応じたうそや道徳判断の発達をさらに深く探究することが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

Hayashi, H. (in press). Preference for distribution by equal outcome in 5- and 6-year-old children. *European Journal of Developmental Psychology*. (査読有り)

DOI: 10.1080/17405629.2018.1428896

Hayashi, H. (2017). Young children's difficulty with deception in a conflict situation. *International Journal of Behavioral Development*, 41, 175-184. (査読有り)

DOI: 10.1177/0165025415607087

Hayashi, H. (2017). Children's understanding of lies in elementary school years. *The Journal of Genetic Psychology*, 178, 229-237. (査読有り)

DOI: 10.1080/00221325.2017.1342592

林 創 (2017). 特別寄稿: “発達”からみる子どもたちの今 「現場に出て実践にふれる大切さ」 発達 (ミネルヴァ書房), 150号, 6. (査読なし)

林 創 (2016). 大人へとつながる児童期の社会性の発達 発達教育 2016 年 3 月号, Vol.35, No.3 (425号), 18-19. (査読なし)

林 創 (2016). 道徳性の発達の基盤 発達教育 2016 年 2 月号, Vol.35, No.2 (424号), 18-19. (査読なし)

林 創 (2016). 赤ちゃんの他者理解と社会性 発達教育 2016 年 1 月号, Vol.35, No.1 (423号), 18-19. (査読なし)

林 創 (2015). 感情のコントロールとその理解の発達 児童心理 2015 年 6 月号臨時増刊, No.1005, 18-23. (査読なし)

〔学会発表〕(計6件)

Hayashi, H. (2017). Young children ' s and adults ' preferences on how to distribute resources. Oral presented at the 18th European Conference on Developmental Psychology, 2017.8.30, Utrecht (the Netherlands).

Hayashi, H. (2017). Do people behave dishonestly easily? Poster presented at the 39th Annual Conference of Cognitive Science Society, 2017.7.27, London (United Kingdom).

Hayashi, H. (2016). Development stage of the attraction effect in decision-making. Poster presented at the 24th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, 2016.7.11, Vilnius (Lithuania)

Hayashi, H. (2015). Children's omission bias related with perceived intention. Oral presented at the 17th European Conference on Developmental Psychology, 2015.9.9, Braga, (Portugal)

Hayashi, H., & Yamada, T. (2015). Is students' critical thinking disposition improved by gaining research literacy? Poster presented at the 5th Vancouver International Conference on the Teaching of Psychology, 2015.7.23, Vancouver (Canada).

林 創・山田剛史 (2015). 学術論文の読みを通したリサーチリテラシー育成の試み 日本教育心理学会第57回総会, 2015.8.28, 朱鷺メッセ / 新潟大学 (新潟県)

〔図書〕(計6件)

林 創 他, 新曜社, 社会的認知の発達科学, 2018, 297 (192-203)

林 創 他, 東京大学出版会, ベーシック発達心理学, 2018, 313 (265-274)

林 創, 金子書房, 子どもの社会的な心の発達 コミュニケーションのめばえと深まり, 2016, 188

林 創・山田剛史 他, 誠信書房, 批判的思考と市民リテラシー, 2016, 239 (89-102)

林 創 他, 新曜社, 心の理論 第2世代の研究へ, 2016, 217 (133-144)

林 創 他, ミネルヴァ書房, 「心の理論」から学ぶ発達の基礎 教育・保育・自閉症理解への道, 2016, 250 (95-106).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 創 (HAYASHI, Hajimu)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号: 80437178